
PHANTOM

我来也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

PHANTOM

【ZPDF】

Z0616A

【作者名】

我来也

【あらすじ】

雪の街・満月の夜・佐山真希は、剣を携えた少女に出逢つ

夢幻の光景

雪が……降る……

ひらり……ひらりと……

雪の花びらが舞う……

空には……月が……

おぼろに……辺りを照らしていた……

まるで……夢幻のようだつた……

白い……ただ白い雪の絨毯に……

赤い……赤い血が広がる……

少女が立っていた……

右手に剣をさげ……悲しそうに俯いていた……

服や髪……そして剣先から……

ポタリ……ポタリと……真っ赤な血が……雪の上に落ちていた……

少女は全身……血に塗れていた……

全ては、現実味を帯びていなかつた……闇夜の昏さが……月の妖しさが……雪の白さが……血の赤さが……剣の輝きが……そして……少女の美しさが……少女が、ゆっくりと顔を上げた。血に塗れた長い黒髪が、微かに揺れた。

透き通つた大きな瞳で、ジッと俺の顔を見る……。

その瞳には…生気が感じられなかつた……。

少女は俺の顔を見ながら…正確には、俺の眼を見ながら、唇の端だけ上げ笑つた。

そして一言だけ言葉を発し、その場に倒れ込む。

澄んだ声で放たれた言葉は、あまりに衝撃的な言葉だつた……

「私…人を殺したの…」

夢幻の光景（後書き）

初めまして！ガライヤです。PHANTOM 第1話、読んでいただき有難う御座いました。第1話と並び、単なるプロローグですが…これからも、PHANTOMを宜しくお願いします

昨夜の幻影

俺は、自然と目を覚ました。

ベッドの中の温もり…心地よい脱力感…。

『寝切つた』という事を示すかのような清々しさ。

窓から差し込む陽射しが浅い。

太陽が高いようだ。

既に昼頃らしい。

俺は天井に腕を伸ばして『伸び』をし、起き上がろうとした。が、その時、違和感を覚えた…。

血の臭いがする…。

部屋に充満する、濃い鉄臭いような生臭いような…血の臭い…吐き気を覚え、急いで洗面所へ向かう。

足を降ろした床の所々に血の乾いた跡があつた。

ダメだ…気持ち悪い…部屋のドアを開け、壁伝いに洗面所へ…やつとの事で洗面所へ着き、途端に思い切り嘔吐する。

胃液ばかりが吐き出された。

俺の部屋が、洗面所に近くて助かつた…と不意に思った。少しばかり落ち着き、口を漱ぐ。

そして考えた…何だこの状況は…。

この吐き気を催すほどの血の臭いは一体…そう言えれば、今日は学校を休んでしまったな…等と、関係の無い事を思い出す。今はそれどころでは無い。

体は何処も痛くない。

自分が怪我をした訳ではないようだ。

だとしたら、一体誰の血だ?何か重要な事を忘れている気がする…。

そうだ…。

昨夜…不意に昨夜の光景を思い出す。幻想的すぎて、夢だと思いつたかったが…鼻につく血の臭いが、現実なのだと俺に知らせる。

あの後、倒れた少女を家に運び込んだんだ。このままじゃ凍死する
と思つて……

「落ち着け……落ち着け……落ち着け……」

鏡の自分と目を合わせ、自分自身に言い聞かせる。

暫く続けると、何とか冷静になつてきた。

あの子は……何処だ？ 最も重要なと思われる事に思考を巡らせる。

取り敢えず、少女を探す事にした。

少女に会わなければ、話は進まないだろう。

チラリと壁に掛けられた時計の針を確認する。

十一時を過ぎた処だった。

やはり昼か……と思ったと同時に、既に居ないので？とも思つ。

兎に角探してみなければ……。

*

少女は簡単に見つかった。

俺は小さい頃から、隠したいモノや大事なモノを仕舞う場所は、いつも同じだった。

俺が小学四年生の時に、両親が他界するまでは物置。

それ以降、俺が高校に上がるまでは使用人の部屋だった一室……。

『高校にあがるまで』と言つ約束だつた使用人が居なくなつて、二年が経つた今も、部屋はそのままにしていた。

片付けるのが面倒だつた事もあるが、少なからず心を開いていた使用人が、俺の前から居なくなつたと言つ事實を受け入れられなかつたんだわ…。

その部屋のドアを開けると、少女はこぢらに顔を向けた。

その部屋に備え付けてあるベッドに、ぼんやりと座つている。

全身…髪の先から足の爪先まで、血が付いたままだ…。血は乾き、じびり付いている。

「起きるの、遅いね…」

呆然と立ち尽くす俺に、少女が笑い掛けた。
昨夜と違い、目には生気が宿つている。

「出て行かなかつたのか？」

困惑して、こんな言葉しか出でこない。
「出て行つてほしかつたの？」

いや、居なくなると思つたから…君が綺麗すぎるから…

「夢かと思つてた」

「残念ながら現実…私は人殺しで、凶器は…」

少女は目を俺から外す。

少女の視線を追う…そこには床に剣が無造作に転がっている。

「警察に突き出す？逃げないけど？」

少女が視線を俺に戻す。

今気付いたが、少女が話す時瞳は、俺の眼を真っ直ぐに見る。

癖なのだろうか…。

少女の大きな瞳で見つめられると、頭がボーッとしてしまう。

「いや、警察には言わない。相性が悪くてね」

俺はそう言って苦笑した。

「シャワーを浴びた方が良い」

俺は提案した。

さすがに、血が全身にこびり付いたままでは居られないだろう。

「ありがと。床に着いた血は、後で拭いておくれ…」

そつと立ちら上ると、俺に近付いてくる。
近くで見ると、一層綺麗だ…。

色白で彫りが深くて眼が大きくて…

「早くバスに案内してよ」

少女の言葉で、不意に我に返る。

「あ、ああ、ゴメンー、そつだつた」

「何慌ててるの」

少女が呆れ氣味に言った。

見取れてたなんて言えないよな…。

「うひちだよ」

俺は風呂場へ案内した…。

ずっと無愛想だったかな…と、ちょっと後悔していた。

昨夜の幻影（後書き）

早くも行き当たりばつたり感が漂つてきましたが…大丈夫！何とかなる！頑張れ俺！負けるな自分！つて事で、感想など頂ければ、一層元気になります！よろしくお願いします。切実に：

血塗の少女

俺は少女を風呂場に案内し、着替えとして、母の服を渡した。少女は「覗かないでよ」

と言つ『お約束』の言葉を残し、風呂場へと入る。

正直覗きたかったが、少女が居た部屋へと引き返した。

部屋の空気を換氣する。

家全体に血の臭いが染み着いていそつだが、やらなによつマシだろう。

それに、血が落ちているのは、フローリングの上だけなので、拭き取ればどうにかなりそうだ。

少し安心し、ホツと胸を撫で下ろす。

大事にならずに済みそうだ。

さて…これからどうするか……暫くして、少女が風呂場から出だした。

母の服のサイズは、少女にピッタリだ。濡れた髪と、上氣した顔が艶っぽい

「で、訊きたい事は?」

いきなり少女が言った。俺は驚いたと同時に、話が早いと喜んだ。

「まずは名前かな」

心の中で少女と言つのも、飽きてしまった。

「相馬 幸灯。アナタは?」

「佐山 真希」

「真希…ねえ?」

幸灯が意地悪そうに、俺の顔を覗き込む。

言わんとしている事は察しがつく。

今まで幾度と無く言われた言葉。そして、自身でも気にしている事

…。

「真希つて…

「女の子みたいな名前だろ（ね）（ね）」

俺は、幸灯にダブらせるよつて、声を発した。

「あ、やつぱり気にしてるんだ？」

笑いながら、そんな事を平氣で言つ…。

いつこう時は、申し訳なれつとするのではないだろうか？

「別に…。氣にしてない。怒るつてほどもなーい」

ムツとして、ぶつかりつつ元に答える。

これせつまつ…

「氣にしつるね」

「……」

やつぱりつ事。

俺は無言の肯定をした。

「……」

幸灯は、澄ました顔で俺を見ている。

「お、俺の事はもう良いだろ?」

無言のプレッシャーに負けて、焦りながら話を変える。

「相馬さんは、何処に住んでるの?」

「言えない」

即答だった。

まあ、易々と女の子が住んでる所を教える訳もないか。

考えが軽率だつたと思いを改め、次の質問をする。

「じゃあ…、相馬さ

「待つて!」

「え?」

いきなり、質問を遮られた。

それに驚いて、間抜けな声を出してしまひ。

「どうか…した？」

「一つ訊かせて？ 真希って何歳？」

「17だけど…」

「私16。年上が年下に、『名字+さん』なんて、あんまり良い事じゃないよ？」

「や、そう…」

突然、突拍子も無い」と言われた。

少なくとも、俺の予想の範疇を遙かに越えていた。

「初対面だし、そんなに年も離れてない。別に『名字+さん』でも良いんじゃない？」

うん。可笑しくないハズだ。

「良いけど…真希は私の事、なんて呼びたい？」

「え？」

思わず聞き返してしまった。

『幸灯』と呼び捨てるのよ、馴れ馴れしい気がするし…

「ま、良つか。好きに呼んで」

俺があれこれ悩んでも、幸灯が言い放つた。

「訊きたい事は何？途中で止めちゃって悪かったけど…」

やつらついで、話を元に戻す。

今一よく分からぬい行動パターンだ…。
が、訊きたい事が山ほど在るので、素直に訊いてみる。

「えつと…。じゃあ訊かせてもらひ」

「うそ」

「何あの場に居たの」

「言えなー

即答…。

「学校は？」

「言えない」

「これも即答…」

少し、質問のインパクトを強くしてみよ。

「じゃあ…何で剣なんて物騒な物を？」

「言えない」

失敗…

奥の手を出すしかない。

最後の質問のつもりで言い放った。

「人殺し…って？」

「……」

幸灯が沈黙してしまつ。

ちゅつとやつ過ぎたかな…と後悔した。

「言えないよ…」

悲しそうに俯く…。

昨夜、幸灯を初めて見た時の表情だ。

「『』…御免」

自分で悲しくなつてきて、軽率な言葉を言つた事を後悔する……。

「……」

「……」

一人の間に沈黙が流れた。
氣まずい雰囲気だ…。

幸灯には、本当に悪い事をしたと思つ。

取り敢えず、この空氣をどうにかしたいが、何か策は無いだろうか

…。

「ねえ、真希？」

俺が考えていると、幸灯の方から口を開いた。

「言いたい事があるなら、言つちやつた方が良いよ?」

「え?何が?」

何が訊きたいか聞き返す。

言葉の真意が今一曖昧だった。

「うん…」

幸灯は言いづらそうに手を泳がせている。

「例えば、『迷惑だから早く出てけ』とか…」

言葉を発する時は、真っ直ぐに俺の眼を見る。

「出て行きたいの？」

「だつて…、私は人殺しだし、物騒な剣なんて持ってるし、事情も説明できないし…」

何だ…そんな事を考えていたのかと、少しばかり驚いた。

図々しいかと思つたら、こんな事も考えるんだなど、自然と笑みが浮かぶ。

「関わりたくない人間の名前なんて、初めから訊かないよ。事情は、話したくなけりや話さなくて良い」

本当にそう思う。

興味が無い訳じゃない。ただ、無理して訊くほどの事では無い気がした。

「本当は私……行く処が無いんだ……。追い出さないと居座っちゃうよ？」

心配そうに、困った表情で訴える。

実を言うと、

「私は人殺しです」

なんて言う人間に、行くあてが在るとは思えなかつた。
だから、大して驚きはしない。

それに俺は、幸灯と離れるのが惜しい。

「Iの部屋を使つて良いよ……」

そして、出来うる限りの笑顔で少女の名前を呼ぶ。

「幸灯」

結局、少女の正体は謎のままか……

まだ逢つて一日目だ。
気長に行こう。

血塗の少女（後書き）

いやあ…進みませんねえ（苦笑書きたい事は決まってるんですが、そこが難しさと書つか何と言つか……。え？作者の技量不足？知つてますとも（ーー）あ、石投げないで（ノ×〇×）ノそれと、感想など頂ければ、大変うれしいです。（^-^）○厳しい意見、励ましのメッセージなど、何でも受け付けています（*^-^*）微妙なテンションの作者は気にせず！今後とも PHANTOM を宜しくお願ひします（^o^）

日常の風景

血の跡を一人で拭き取り、俺の家の事について話した。

同居生活を始めるのに、必要な事だからだ。

両親が既に他界しているため家に一人暮らしな事、困らないほどの生活費はある事…。

一通り話し終わつた後、折角なので俺は風呂へ入つた。上がつた時には、食卓には一年ぶりの『インスタントではない』夕食が並んでいた。

俺の荒んだ食事情に、幸灯が呆れたように家事を引き受けてくれた。

少女：幸灯との共同生活が始まつた。

次の朝は学校に行つた。

無断欠席した俺に、気遣うクラスメートの声や、なじる担任の言葉を適当にやり過ごし、部活をして疲れて帰る。

ちなみに、部活は空手部。

いつもと変わらない日常の風景が過ぎていつた。

家に着くと汗を流し、綺麗な少女が夕食の準備をしてくれる。

夢のような生活だ。

同居生活に当たつて、下心が無いと言えば嘘になる。

だが、そんな事よりも、幸灯を一人にするのが怖かつた。

一人にしたら、何をするか判らない不気味さがある。

まあ、単純に楽しそうなのも事実ではあるのだが…。

夕食を食べる時、俺はいつものようにテレビを点けた。

別に、幸灯との食事が気まずかった訳ではない。

むしろ、話す事は沢山あるし、何故だか幸灯とは親友のように打ち解けていた。

食事の時にテレビを点けるのは、一人で食事をしていた為、半ば癖になつているのだろう。

観る気は無いので、チャンネルを合わせるでもなく、そのままの番組にしていた。

ニュース番組だった。

この街の名前がチラリと見えたので、何の氣も無しにニュースを観る。

“速報です”と言断つてから、ニュースキャスターが原稿を読み上げる…。

五人の変死体が次々と見つかった…。

全て干からびるほど血を抜かれており、身元を割り出すのは困難…。

連続猟奇殺人事件として警察が捜査を開始した…。

俺は声を失った。

この街は、比較的治安は良い方だ。

少なくとも、俺にはこの街で起きた大きな事件は記憶にない。

それが…獵奇殺人?

食い入るように画面を見続ける。

「ワ…セ…

ボソリと幸灯が口にした。

「え?」

声に聞き返す。

「何でも無い…。追い出さないでくれて本当に有り難う。もう寝る
ね

そう言つて俺に笑顔を向けると、幸灯は早々に部屋へと籠もつてしま

まつた…。

食事もまだ途中だ。

だが俺は、幸灯に声を掛けられなかつた…。

幸灯の言葉を聞いてしまつた気がしたから…。

「私のせいだ」

何だか胸騒ぎがする…。

気のせいであつてほしい…。

まだ、幸灯と逢つて三日目だ…

日常の風景（後書き）

お久しぶりです（^_0^）／やつと暇が出来ましたー・ヤツタネ 感想を頂きました！俄然やる気でましたよ（^_0^）元気一万倍ぐらにはなっています！今なら100m走のタイムが0・3は縮まりそうな勢いです！シッカリ更新していくので、これからも宜しくお願いします（^_-^）そして！引き続き感想など受付中！「ツマニネエよー！ヴォケガ！」とかでもOKです！嘘です…orz弱弱な作者を労つてあげて下さい（T_T）

朝になつた。

幸灯の姿はなかつた…。

やつぱり…。

と言ひ虚無感に襲われる。

昨夜の幸灯の言葉から、何となくそんな氣はしていた。心にモヤモヤが残つているが、なんて事はない。

見知らぬ少女を一晩泊めただけだ。

それに、初めから現実感なんか無かつた。

これからも、平凡な日常を歩いて行くだけなんだ…。

そう自分に言い聞かせ、今日も学校へ行つた…。

* 学校には来たものの、何だかやる氣が出ない…。

ボンヤリと受ける授業は、中身を伴わず…、駆けるような早さで過ぎていく…。

鐘の音が、やかましい音を立て、四時限目終了を報せる。

あつと言ひ間だつたな…。本当にあつと言ひ聞…。

「真希ちやんどうした?」

窓の外を何となく眺めていた俺に、新井 あらい 美貴 よしだか が話し掛けてきた。

「“ちやん”を付けるな。みき」

「お前じゃ、みきて読むな、ヨシタカって呼べよ」

「冗談を言ひ合ひ元気は残つてゐるらしー。

「早く学食行こいぜ。席が無くなつちまつ」

いつもの調子でヨシタカが誘つ。

確かに、早く学食に行かなければ席が無くなるのだが…

「どうした…つて、何がだ?」

「何でもねえよ。取り敢えず、元氣出せりつてこつた

ヨシタカはそう答えて教室を出ていった。

驚いた。端から見ても落ち込んでたのか…？

「ま、待てよヨシタカ」

俺はヨシタカについて学食に向かつた。

学食に着くと、やはりと言つか…生徒で溢れていた。

「お前がぼうつとしてるからだぞ？」

「わあるかつたな」

美貴の意地悪に、苦笑で返す。

「Aランチ残つてるかなあ？」

「どうだらうな…俺はBだから関係ねえ」

他愛の無い冗談を言い合いながら、席を確保し

「肉が少ねえ！」

「味付け濃くないか？」

昼食をとる。

さつきまで暗くなっていたのが嘘のよつに、笑う事が出来ていた。

これだから、“友達”ってのは有り難い。

「あーそう言えば、知ってるか？」

「何が？」

ヨシタカが何かを思い出したよつて（実際そつなのだらう）声を上げた。

「獵奇殺人だよ」

「あ…ああ」

何となくドキッとしたが、曖昧に頷いた。
厭な汗が流れてくる。

知つてゐるよ…幸灯が居なくなつた原因だ…

多分。

勝手な憶測でしか無いのだが、俺には漠然とした確信があった。

幸灯は、この事件に関係がある。

まあ、出逢つた状況を思えば、当然の考え方と思つ。

「この街には珍しいよな。つて…何処に行つても珍しいか

「ああ…やうだな…」

俺は生返事を返した。

幸灯の言葉を思い出す。

私のせいだ……

そう聞こえた。
どう言う意味だ？

雪の中、血塗れで剣を提升了幸灯

私…人を殺したの…

そう言つて意識を失つた幸灯

何なんだ？一体…

開けっ広げで、よく笑う…
そのクセ、実態が掴めない…
時折見せる、寂しそうな顔…
触れてしまえば消えて無くなりそうな儂を…
くるくる変わる瞳の神秘さ…

幸灯…

何で…こんなに気になるんだよ…

「真希い？聞こえてつか？」

「えー？」

現実に急に引き戻され、思わず声を上げてしまつた。

「あ……」

ヨシタカの言葉で、自分一人の世界に落ちていたらしい事に気付いた。

「本当、大丈夫か？ 今日の真希、変だぜ？」

「ああ、悪い」

「悪かねえけどよ……」

そう言つと、暫く沈黙が流れた。

「ふう……」

ヨシタカが溜め息を一つ吐くと、そつと口を開いた。

「お前の事だ。悩み事でも在るんだろ」

「え……と……」

ヨシタ力が真顔で俺を真っ直ぐ見、図星を突いてくる。

返答に困った。

「一人で抱え込むなよ?」

ニヤリと笑い、更にそう言つ。

正直、全てを話したかった。

ヨシタ力になら、幸灯の事を話しても大丈夫だろう。
少なくとも、警察沙汰などの大事にはしないハズだ。
俺はヨシタ力を信頼している。

でも、誰かに話してしまつたら…

何故だか、幸灯には一度と会えない気がして…

やつぱり…話せない…

「ゴメン…ヨシタ力」

そう言つて俺は突然立ち上がつた。

「急用だ!今日サボるわ!」

幸灯を探そう。

何処に居るのか見当も着かない。

だけど…

「了解。鬼に角、応援してやせー。」

背中でヨシタカの声が響いた。

優しさが痛かつた…

空虚の学校（後書き）

今更更新しました…。いやあ～すっかり春ですねえ～日本にもまだ雪が降つてるので、許して下さい…。o r n

幸灯の残香

取り敢えず、家に急いで帰った。

何か手掛けりが欲しい。

突発的で行き当たりばつたりな行動だが、幸灯が気になるんだ。

仕方が無い。

こんな衝動に駆られたのは初めてだ…幸灯の使った部屋を確認する。朝にも軽く見回していたが、当然の如くその時と同じ風景が広がっていた。

見慣れた…主の居ない部屋…初めから幸灯が存在していなかつたよう…ベッドと生活に必要な家具一式はあるのだが、不思議と温かみの無い部屋…無性に寂しさが込み上ってきた。

居たたまれない。

俺は部屋を後にしようとした…が、何だか違和感を感じて、もう一度部屋を見回してみる。

よく見ると、ベッドの下の隙間から…

「布…？」

布の端が僅かに覗いていた。

そつと引っ張りだしてみる。

ズルズル…意外と重量を感じた。

とは言え、あまり重くはなかつたのだが…全て引き出しても、それは棒状の物に巻かれているようだ。

長さは1メートル強…この時点で中身の予想は出来た。

確かめようと、巻かれた厚めの布を解いていく。

やつぱり…全て解き、中身が露わになった。

予想した通り…中身は抜き身の剣だった…。

吸い込まれそうな輝きを帯びた…人殺しの凶器…幸灯が提げていた

…血塗れの剣…

「……」

どれくらいだろ？…数分か…數十分か…或いは数秒か…剣身に魅せられ、見つめていた。

一つ息をした後、そつと布を巻き直す。

そして、布に巻かれた剣を右手に提げ、家を飛び出した。

幸灯の行き場所の心当たりなんて、皆田見当も付かない。

だけど飛び出した。

この剣が…俺を幸灯に引き合わせてくれる。

そんな気がした…

*

「佐山 真希…もうすぐ死ぬわよ」

「はあ？」

昼休みも半分が過ぎた頃だ。

真希を見送った直後、見覚えの無い女が話し掛けってきた。

その上、訳の解らない事を吐き出したんだから、たまつたもんじゃない。

「アンタ……突然何を言い出すんだ？」

「……」

俺の問いには答えず、勝手に向かいの席に座る。

そして、何事も無いかのように、カレーうどんを啜り始めた…

「おい…」

呆れた…マイペース過ぎるだろ…学年を表すリボンは赤。俺とは一学年上の上級生だ。

目が大きく、顔はわりかし可愛い。

だが、幾分無愛想な雰囲気を漂わせている。

真希の事を知ってるつて事は、真希の知り合いか？

「一体、どう言つ事だ？ 真希の奴がどうしたつて？」

ズズツ…箸を止める気配が無い…

「聞こえてないのか？」

ズルズルツ…

「おーい…」

ズウウツ…いい加減腹が立つてきた…

「人の話を聞きやが
「聞こえてるわ」

「…」の女…怒りが込み上げてきた。絶対バカにされてる…

「ふう…」

女は、ようやく箸を止めて一息ついた。

そして…

「カレーうどん…汁が跳ねなきゃね？」

「確かに…って、オイッ！」

何なんだ…思わずソシ 「ミ」を入れてしまつた…

ズルズル…

またカレーうどん騒り出したし…

怒りが萎えた。

俺は俺でAランチを食べる事にする。

女は、丼を傾けて、汁の一滴も残さずに食べ終えた。

そして一言

「放課後…話したい事が在るわ。空けといてね

その後、やっぱり何事も無かつたかのよつて席を立ち…

去つて行つた…

夕陽の教室

約一時間後

無事全時間割を消化！
HRも終わり！

帰宅部の俺は、普段なら真っ直ぐ帰宅だ。

だけど、今日は違つ。

クラスには、既に俺しか残つていない。

宿題でもじてゐるか

「いやつて見ると、誰も居ない教室つて、予想以上に寂しいんだな
あ。

なんて、柄にも無く感傷的になつたりもする。

て言つた、あの女、場所の指定してねえじやん！
ここで待つてて、本当に現れるんだろうな？

「良かった。ちゃんと居た」

イライラが頂点に達する処で、あの女の声がした。

「遅えよ。で？話つて何なんだ？」

早速訊ねる。

「あ、生物の課題？ 大変だね」

女は俺の前の席に横向きに座り、俺が広げていた教科書とノートを見て言つた。

「半分アンタのせいだ。で？ 真希がどうしたって？」

真つ直ぐ顔を見て返す。

「……」

女が俯いた。

泣いてるとかじやなく、悩んでるよ？

何となく気が引けるが、ここで黙つたら意味が無い。

「最初に話しあったのはアンタだろ。今更何を躊躇つてるんだ？」

追求した。

「やつぱり、話さなきやね。人の命が掛かってるんだから…」

女がようやく口を開く。

「何から話して良いのか…。初めから聞きたいや要素だけ?」

そんなもん

「アンタが話しあさりしてくれ

「解った」

女は承諾すると口を開いた。

「この街には昔から、魔物が棲んでいるの」

「はあ?」

思わず声を上げてしまった。

だって…魔物って…ねえ?

爆笑しなかつた自分を誉めてやりたい。

「まあ、当然の反応よね。信じるのは言わないけど、一つの事実として受け止めて」

「つよ…」了解

睨まれた。

ノーとは言わせない迫力だつた。

満足したのか、フツと笑つと、再び口を開く。

「ひつそりと、迷惑をかけずに暮らしてた。見た目は、人間とほとんど同じ。ただ、食べ物が生命力つてだけ」

「ぶつ…物騒な好物だな」

「そうね…確かにそう。でも、大勢の人から少しづつ、命に支障が無いくらい貰つて生きていたの」

まるで、夢を見るような顔で語つていた。

そつと、もの悲しい茜色が教室に溢れる。

冬の日暮れは早い。

少し、ほんの少しだけ魅入つてしまつた

「人間つてね、自分達が理解出来ないモノは排除したがるのよ。例え無害でも」

夕陽の教室で、俯き加減で話し続ける。

「当然のように魔物狩りが始まったわ。魔物達も抵抗したんだけどね。結局ほぼ全滅」

「それが、真希の命とどう関わりがあるんだ？」

確かに、一つの事実かも知れないが、俺が聞きたい事と大分違う。

全面的に信じる気にはなれないが…

「魔物達はね、反抗なんてする気は無かつた。命を食べるからこそ、命の大切さを知っていたのよ」

「……」

「話しかけないのは、この女の特長だろ？」「

「それでも、人間は、完全に排除しないと気が済まないとかしら？」「今でも、魔物狩りは続いてる」

「今でも？」

仕方無い。とことん付き合おう。急がば回れの精神だ。

「それは良い。魔物達も受け入れ、諦めてる。でも…」

スッと、女は立ち上がり、窓の方へ歩いていった。

「魔物の一人が怒り狂ってる。佐山 真希は巻き込まれるわ。退魔士の匂いが付いていたから」

信じる氣は無い。

話が突拍子も無さ過ぎる。

ただ、危うく信じてしまいそうになるほど、妙な説得力があった。

「佐山 真希を救つてあげて」

46

女が振り返り、夕陽を背にして言った。

黄昏を背負った女の輪郭は、黄金色に縁取られていた

「あー…」

何を言つて良いか判らなかつた。

なるべく冷静に言葉を選んでみる。

「救うとか、よく解らないんだけどさ。真希の様子も変だつたしな?
具合も悪そうだったから。見舞いぐらいは行こうかな」

信じてない
信じてはいなが

「俺は何すりや良いんだか

俺は肩を竦めて、出されてくるホールドを鞄にしまい、帰る準備をする。

「何もしなくて良い。ただ、傍に居てあげて

逆光で見えないが、女が笑った気がした

「解った」

と頷く代わりに、鞄を持って教室を後にした。

「あの子を助けてあげてね」

女は俺の背中に呴いた…

夕陽の教室（後書き）

評価して下さった方、ありがとうございました。御指摘の点、見直させていただきます。（――）そして、出ました説明屋…ここが一番大事!…と言つより、今まで不必要な処が多くありました。（反省）――

魔物の招待

幸灯を失いたくないもう、誰かが居なくなるのはたくさんだ！夕陽に向かつて走る。

ただ走り続ける。

もう、随分と走り回つていた。

が、体力は何とか保ちそうだ。

部活の厳しい練習も、時には役に立つ。

この街には珍しくもない雪が舞い始めた。

溶け残り積もつた雪が一面を覆つている。

その上にひらり…ひらり…夕陽が雪を真っ赤に染めていた…真っ赤な雪は、幸灯と出逢ったあの時のように…その光景が、幸灯との再会を約束しているようで…ただ走り続けた。

「おい、お前」

不意に声を掛けられた。

低く抑えた声走つていた俺に、聞こえるほどいの声量とは思えないのだが、何故かはつきりと聞こえた。俺は足を止めて、振り返つた。

「お前から、あの女の臭いがする」

そこには、金髪の男が目を細めて俺を見ていた。

年は俺と同じか？少し下だろうか？男と言うには少々幼い全体的に線が細いのも幼く見せる要因だろう。

「女…って…幸…灯の事…か？」

情けないが、息が切れていた。

坦々と走る分には良いが、話すとなると別なようだ。

「ユキヒと言うのか？あの女。その剣の持ち主だ」

俺から視線を外し、俺が右手から下げた、布にくるまれた剣を見やる。しかし、横柄な口を利く奴だな

「だったら…何だつて言うんだ」

左手の甲で顎に流れた汗を拭い、睨みつけた。

それを聞いて、男がニヤリと笑つた。

「そうだな…。ならば此方へ来い」

踵を返し男が歩き出す。

素直に従うのは癪だが、付いて行くしか無い…か。

* 男は、自分は魔物だと名乗つた。

そして、俺が付いて来てるか確かめるように、何度も首だけ振り向きながら、魔物の話をした。

害意を持たない生物だと強く主張しながら…何百年も無抵抗を通してきた事迷惑など掛けず、ひつそりと棲んでいる事現に、人間に紛れて無数に生活している事今も人間に迫害され、虐殺され続ける事

「人間って、俺は魔物の存在なんて知らない。信じられないしな」思わず反論した。“人間”なんて一括りにされたって、知った事じやない。

「人間の本質なんて、どれも変わらないよ」

魔物が、悲しそうに呟いた。

何だか物悲しい、そんな雰囲気だった。

感慨を込めて放たれた言葉に、何も言つ事は出来なかつた。

いつの間にか辺りは暗くなり、前方に、やけに大きく、そして丸い月が、ぽっかりと浮かんでいた。

人気の無い路地に入り、更にその先…

忘れ去られたように何も無い、寂れた広場が在つた。

「此処だ」

男が広場の奥の方を指差した。男の指先を辿る…

「つ！？」

其処に在るモノを見て、衝撃を受けた。

其処に在ったのは…半ば雪に埋もれた幸灯だった

魔物の招待（後書き）

読んで頂き、ありがとうございます。タイトルが…苦しい（苦笑）

真希の闘攻

ドシャツ…

右手から剣が落ちた。

「ハハハハハツ！少し撫でてやつたらこの様だ！」

男が可笑しそうに、腹を抱えて笑っている。

こいつ…

「赦さねえつ！！」

男の顔に思い切り拳を叩きつける。

ガツッ

鈍い音を立てたが、男はニヤリと笑った。
ダメージは…無いようだ。

むしろ、俺の拳が痛いぐらい。まるで、岩でも殴つたみたいだつた。
「俺達の力は人間と大差無いが、命を吸い尽くすとな…その分の力を
を得る事が出来るんだ」

男は嘲笑しながら言う。

「説明、サンキューツ！！」

俺はそう言いながら、男の頭に回し蹴りを仕掛けた。

ゴツッ

今度は少し、男の頭が揺れた。

相変わらずダメージは無さそうだが…

「今の俺は、俺本来の力に、五人分の命が加わっている」
男は腰を落とし、力を込めた。

「キキキ…と醜い音を立てると、男の背中から、黒い、蝙蝠のよつ
な翼が生える。

「魔物…」

思わず呟いてしまった。

「人間など！滅んでしまえば良いつ…！」

魔物が叫ぶ。

空気がビリビリと震えた。体中から、凶々しいオーラを発している
ようだ。

「静かに暮らす事すら許されない！どれだけの苦しみか、お前に解
るかあーっ！」

魔物が力任せに腕を振る。

裏拳が頬に激突し、体が数メートル吹き飛ばされた。
咄嗟にガードしたが、殆ど無意味だった。

壁にぶつかって止まる。

久々にキツい一撃だった。

「人間など、こんなにも脆いモノなのに…」

魔物が、呟いた。

見下した目

「ムカつく奴だぜ」

睨み付けた。

拳を握る。

体中に意識を巡らせた。

頭がガンガン痛むが、体を動かすのに支障は無いようだ。

口の中に血の味が広がっている。

ちょっと切ったかな？

俺は全身に力を込めて立ち上がった。

「真…紀…？」

不意に、近くで声がした。

声に振り向く。

「幸灯！？」

「真紀……」

弱りながら、俺の眼を真っ直ぐに見返している。
魔物の事なんか後回しにして、幸灯に駆け寄った。

「幸灯！」

上半身を抱き上げ、体中の雪を払い除けてやる。

「幸灯、大丈夫か？」

出来るだけ優しく声を掛け、そつと抱きしめた。

良かつた…良かつた、生きてる…

「真紀、『ごめんね…私のせいで…』」

俺の口の端から流れる血を、そつと親指で拭ってくれた。

幸灯と俺の視線が交わる。

幸灯：

「その女は、簡単には殺さん」

雰囲気をぶち壊す声と共に、俺の髪を掴む手。

「退けッ！」

そのまま、幸灯と引き剥がされるように飛ばされた。

地面の雪に、俺が滑った跡が残される。

「この女だけは、絶対に！」

魔物は幸灯の手首を掴んだ。

俺は反射的に立ち上がり走った。

「赦さんっ！！」

魔物が幸灯を、振り返り様に投げ飛ばす。

ドンピシャのタイミングで、幸灯を抱き止めた。が、威力を殺し切れずに吹き飛ばされる。

腰を打つたが、雪が衝撃を和らげてくれた。

俺は幸灯を横たえ、立ち上がった。

「幸灯、逃げる」

真っ直ぐ魔物を見ながら言った。

「でも、私のせいでの、こんな

「早くしろ！」

迷うような口を遮った。

「幸灯のせいとか、魔物がどうとか、そんな事は関係無い。俺が、

幸灯に生きてほしい。それだけだ」

幸灯を振り返り、言い聞かせる。

俺の素直な気持ちだった。

「あいつ、どうにかしなきやな！」

幸灯の返事を待たず、魔物を睨んだ。

「どうにか出来るつもりか？」

魔物がニヤリと笑った。

魔物に突っ込む。

勢いを付けて飛び蹴りした。

「グッ」

胸の辺りに当たった蹴りに、魔物が呻いた。

ちょっと効いたかな？

俺は、着地と同時に体を回転させ、同じ位置に後ろ蹴りをする。遠心力の乗った蹴りが、魔物を吹っ飛ばした。

「スゴい……」

幸灯が俺の背に呟いた。

真希の闘攻（後書き）

改行方法が変わって、一話から見直してみたんですが
見づらい…。orz

PCの方、本当にスマセソでした。
以後、気を付けていきます（^_^）
(v_v)

月夜の遭遇

俺が真希を見つけたのは、いい加減体力の限界つて時だつた。
真希の家には鍵が掛かつてないわ、中に入つたら蛻の殻もぬけだわ、妙に
血液臭いわ…。

流石に焦つたが、真希なら大丈夫だと信じて“それっぽい場所”を探し回つた。

見つけた時、やけにデカい満月の下、異形の相手に、綺麗なフォームの跳び蹴りを決めていた。

参つたねえ。背中から蝙蝠の翼、魔物かよ。

そんな相手に間髪入れずに後ろ蹴り。吹つ飛ばしやがつた。

「スゴい…」
すぐ近く。

足下の辺りから女の子の声がした。

声の元を見やると、そこには美少女。ははあーん、なるほどね。

「アレが佐山 真希だ。普段はパツとしないが、目的がハツキリする」とモンスターもぶつ飛ばす「妙に誇らしい気持ちで、少女に語り掛けた。

真希に見入つていたらしい少女が、俺を見上げた。

『何この人』って視線を向けられた気もするが、ここは無視だ。

「真希の…友達?」少女が俺に訊ねる。呼び捨てする仲ですか。あーそうですか。

と言ひ内心は晒さず

「親友つてヤツかな?」

なるべく二ビルに、口元だけで笑つた。

「せいつ！！」

真希の気合いが響いた。

真希に目を戻す。

倒れた魔物の顔を、踵で踏み付けていた。

「え、エゲツねえ…」

あそこまでやるかね？

俺に気付かない処を見ると、相当厄介な相手なんだろうが。

「友達なら、真希を助けてあげて！」

魔物を圧倒してゐる真希を、助ける？

「何言つてんだ」

と言おうとしたがやめた。

真希の足首を掴んで、魔物が起き上がったからだ。

そのままブン投げる。

う、嘘だろ？

真希は壁に直撃してしまった。

ま、魔物ねえ？ 納得した。

「お願ひ！ 真希を助けてあげて」

少女が再び俺に頼む。

俺は真希の方を見ながら、それに答えた。

「何で真希は闘つてる？ 理由によつちやあ、手出しあは出来ない」

真希個人の闘いなら、手助けしたら怒るしな。

「私のせいなの。私が、あの魔物を怒らせたから…」

この子が退魔士か。

「何で君が闘わない？」

少女の方を見やり、疑問を口にした。

俺の見る限り、少女は動ける。

「ダメなの…。剣を持つのが怖いの…！」

少女が思い切り叫んだ。

「ヨシタカ！？」

少女の叫びに目を向けた真希が、俺に気付いたようだ。

「増えたか、人間！」

ついでに魔物まで…

しかも魔物の奴、こつちに歩いて来やがった。

「その女はな、人間を殺したのさ。手違いだつたようだがな」「もう許してつ！」

少女が両手で耳を塞ぎ、絶叫した。

あまりに痛切な叫びだ。

「許せんな！俺達魔物は簡単に殺しておいて！人間一人で喚き散らす！貴様だけは赦さん！」

魔物の奴も、負けず劣らずの大絶叫。

ウルサいな。

その間に、魔物が少女の前に立つた。

「ごめんなさい」

力無くうな垂れた少女の髪を、魔物の奴が掴んだ。

そして顔を上向かせる。

「許して…下…さい」

泣きながら、心の底から哀願してゐる。

俺にはそう見えた。

「貴様を殺すのは最後だ。貴様の周囲の人間から、絶滅させてやる！」

「おい」

あんまり関わりたくないんだがなあ。
状況もいまいち把握できないし。

でも、やり過ぎだよなあ？

俺は魔物の肩をポンッと叩いた。

それに気付いた魔物は、当然振り向く訳で…

「俺から殺しやがれ！」

魔物の喉元に巻き付くように、俺の腕をぶつけ、そのまま振り抜いた。

渾身のショートレンジ・ラリアット！

不意打ちだったが、女の子を泣かしちゃいけねえよな。
魔物の体が勢いを付けて倒れ、地面に後頭部が激突した。

俺はそれを確認し、真希の傍に移動する。

「俺も標的みたいだからさ、一緒に闘^やろうぜー！」

手を差し出し、真希を助け起こす。

真希は起き上がりると、唇の片方だけ上げて笑い

「ああ

とだけ言った。

魔物がユラリと立ち上がった。

真希が足を肩幅に開き前後させ、拳を握つて構えた。

俺は自然体。

特に構えなんて無いしなあ。

「望み通り、まず貴様から殺してやる」

魔物が俺を睨みつける。

鞄を投げ捨てながら

「殺つてみな

歯を見せて笑つてやつた。

月夜の遭遇（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます！
次からバトル開始です！

最強の一人

「来るぜ」

ヨシタ力が緊張したように呟いた。

その呟きが終わると同時に、魔物が突っ込んでくる。

速い！

あつと言つ間に距離を詰め、ヨシタ力に腕を振り降ろした。

腕を交差させ、魔物の攻撃に耐える。

「グッ…」

重すぎる攻撃に思わず声が出た。

間髪入れず、魔物がもう一発入れようとする。

ガードは無視しているようだ。

「俺を忘れるなよ！」

ヨシタ力に気を取られている魔物のこめかみを、正拳で殴り付ける。

相変わらず石を殴つてるような手応えだ。

魔物はヨシタ力への攻撃を中断して、俺に振り向き、拳を振り上げた。

振り降ろす前に、覚悟を決め、ガードのため構える。

俺に激突する寸前に、魔物の動きが止まつた。

ヨシタ力が、魔物の片足を持ち上げたからだ。

「ドリアツ！」

そのまま魔物の膝を中心に体を回転させる。

その回転は、魔物の膝を外側に捻り、勢いで投げた。

ドラン・スクリュー

「少し離れるぞ」

「ああ」

それを見た後、ヨシタ力と一緒に再び魔物との距離をとる。

作戦を練つておきたい。

ヨシタ力が居れば、百人力だ。喧嘩馴ればしている。

スタイルがプロレスつて言うのが少しばかり謎だが…

「あいつ、魔物なんだ。本来の力は、人間と大差無いらしい」
魔物に警戒をしながら、ヨシタ力に告げる。作戦を練る上で、ヨシタ力に酷な事実を伝えなければならない。

「魔物つてのは知つてる。けど、人間と大差無い割に、随分と重かつたぜ？」

「普段の力に、人間5人分の力を吸い取つたんだよ」
ヨシタ力が魔物の存在を知つてるのが不思議ではあつたが、其処には触れなかつた。

今一番大事なのは魔物をどうにかする事だ。

まあ、蝙蝠の翼なんか生えてたら、どう見ても人間じゃないしな。

「マジかよ！？通りで…」

魔物が立ち上がり、ニヤリと嗤つ。

「効かない訳だ」

魔物を見ながら、ヨシタ力が苦笑した。

魔物が走り出した。時間が無い。大まかな作戦を立てる。
とは言え、魔物は只の力馬鹿だ。正攻法で十分いける。

「相手は一人、こつちは一人」

「そんな場合は…」

魔物が俺とヨシタ力の間に突つ込んできた。

「この手だな」

ヨシタ力の言葉が終わると同時に、一人で左右に分かれて避けた。
挟み撃ちだ。

一瞬魔物が、どっちを追つか迷つたらしい。動きが止まつた。
チャンスだ。

ヨシタ力も当然それに気付く。

「（攻撃が）効かないならつ！…」

「頭あつ！」

ヨシタ力が魔物の頭を正面から脇に抱え、自ら後ろに倒れ込む。

俺はそれに合わせて、下段蹴りで魔物の足を刈った。

魔物が堪まらずヨシタ力の体重に持つて行かれ、雪の積もった地面上に、頭頂部を激突させる。

DDT

俺とヨシタ力は、魔物から三歩分距離をとつた。俺が後ろ、ヨシタ力が前。

魔物はスピードもある。間合いを空けるのは、どんな対応も出来るようだ。

「グゥウウッ」

魔物がゆっくりと身を起こす。

片膝立ちで頭を抱え、苦しそうに唸つた。効いてる！

「ヨシタ力！“アレ”やるぞつ！」「オツケー！」

俺の呼び掛けに、ヨシタ力は直ぐ様応えた。それを合図にし、二人で魔物に走り寄る。そして、其々の技を出した。

ヨシタ力は、魔物の立てた膝に片足で飛び乗り、もう片足で顔面に膝蹴りをする。

俺は走った勢いのまま、魔物の後頭部に膝蹴りを放つた。

ヨシタ力のシャイニング・ウェーブードと俺の膝蹴りのタイミングは完璧に一致し、魔物の頭をサンドイッチにした。

グシャツ

普段なら不快であろう頭蓋を碎く感覚が、ズボン越しに伝わる。だが、この時ばかりは、其程不快感は無かつた。

最強の一人（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。御座います。

バトル！闘い！

やつちゃいました…趣味に走りました…。
激しい動きつて、文字にするの難しいですね。
ただの高校生がここまで強いとは、自分でもビックリ…。
まあ、ファンタジーと言つことで（^○^;）

暫時の決着

どうだ？

感触からして、確実に効いたハズだ。

さつと体を離し、魔物の周りをゆっくり回りながら警戒する。

ヨシタカも、俺に習うように同じ行動をした。

一応の警戒はしているが、倒したと確信している。これで立つたら本物の化け物だ。

丁度魔物の前に回り込んだ。魔物は片膝立ちで頭を垂れたまま、動く気配が無い。

気絶したか？

そつと魔物の顔を覗き込んだ。

ギラリ

魔物の眼が、黒く鈍く輝く。

「うわ……」

俺は思わず尻餅を着いてしまう。

魔物が俺を睨んだ。

「貴様等……」

魔物の鼻と眉間に深々と皺が寄り、眉を逆立て、尖った犬歯を覗かせる。

顔が、醜く、怒りの表情を浮かべた。

「殺してやるッ！――」

俺を睨みながら、ゆらりと立ち上がる。

今までに無い圧倒的な眼力で見下ろされた。

ダメだ…殺される…。

ダメージ的には、決定的に勝っている。
でも、理屈抜きにそう感じた。いや、確信してしまった。
背負つてゐるモノ…覚悟の量が違います。こんな奴、勝てる訳がない…。

魔物が、ゆっくりと片足を上げた。

踏み殺すつもりか…

恐怖に駆られ、ただ見てゐる事しか出来ない。

ああ…終わりなんだな…

不思議と、何処か客観的にそう思つてゐる自分も居た。と…

「！？」

魔物の軸足までが宙に浮いた。

「な、何だ！？」

魔物が声を上げた。驚いてゐる。

魔物の腹部に回された腕。胴体をガツチリとホールドし、持ち上げ
ている。

ヨシタカッ！

「そんじゃ、トドメな」

笑いを含んだ声。トドメの宣言までしてゐる。

顔は見えないが、きっと唇の片端だけ上げて、不敵に笑つてゐるん
だろう。

「は、離せ！」

魔物がヨシタカの腕を振り解こうと暴れ、叫んだ。

「頼もしい奴だ」

思わず口から漏れた。自然と笑みを浮かべていた。

そして

「喰らええ！」

ヨシタカが勢いよくブリッジをした。魔物の胴体をホールドしたまま…

「グアアアアツ」

もちろん、魔物はヨシタカを中心に後方へと投げられる。

ジャー・マン・スープレックス

魔物に受け身などとれるハズも無く。

ガンツ

遠心力が乗つたまま、後頭部を地面に激しくぶつけた。

雪がクツショーンになる事など、全く問題になつていない、鈍い打撃音だった。

「ふう…。よつこいせ」

魔物の下になつたヨシタカが、魔物を横に転がして脱出する。

「説得力、十分だろ？」

立ち上がつて、魔物を踏み付けて笑う。

魔物は、ピクピクと体を痙攣させていた。

「ああ…スゲエな」

俺も立つた。

本当、お前が居てくれて助かったよ。ヨシタカ、ありがとうな。心の底から思った。でも、口には出さない。

「まあな」

ヨシタカが、得意そうに笑つた。

そうだ、幸灯！

不意に思い出す。

いや、忘れていた訳では無いが、魔物との戦いに集中していた。

「幸灯は…」

ヨシタカから視線を外し、幸灯を探してみる。

居た。

逃げなかつたらしく、その場にうずくまつて居た。怯えたように、ガタガタと震えている。

「幸灯、もう大丈夫だ」

急いで幸灯に歩み寄つた。

*

と、真希は行つてしまつた。

「幸灯、寒いだろ？」

真希があの子に上着を掛けてやつている。

俺は邪魔そうかな？なんて、軽く肩を竦めた。

帰るか…

今は体を動かした後だから良いが、すぐに汗が凍るほど寒くなるだろう。

真希とあの子の熱々ぶり（死語か？）を見せ付けられると、余計に寒くなりそうだしな。

「そんじゃあな」

一人に手を振り、魔物から離れて鞄を拾いに行つた。

げ…

未だに降り続ける雪は、俺の鞄の上にも容赦なく積もつてくれた。

水、中まで染みてないだろうな？

手に取り雪を払った。

久々に、珍しく！課題なんてやつたんだ。濡れて全部パアになんかなつてないだろうな？

中を確認しようと、鞄を開けた。

「ヨシタカー！後ろ！」

えつ……？

首筋に走る鋭い痛み
やけに熱い

えーっと……状況が掴めないんだが……？

目の前に広がるのは……

何かを叫ぶ真希

顔を蒼くした少女……

真っ白な雪……

真っ暗な闇……

光る月……

焦点が合わなくなってきて、全てが霞掛かってきて、全部溶け合つて……

もひ、何が何ぢ？

ヤベ…氣持チ良クナツテキタ…

暫時の決着（後書き）

読んでいただき、有り難うござります！

評価、感想、励みになります！

新たに気合いを入れ直し、更新していきたいと思います！

もう、4月になってしまつ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0616a/>

PHANTOM

2010年10月14日15時47分発行